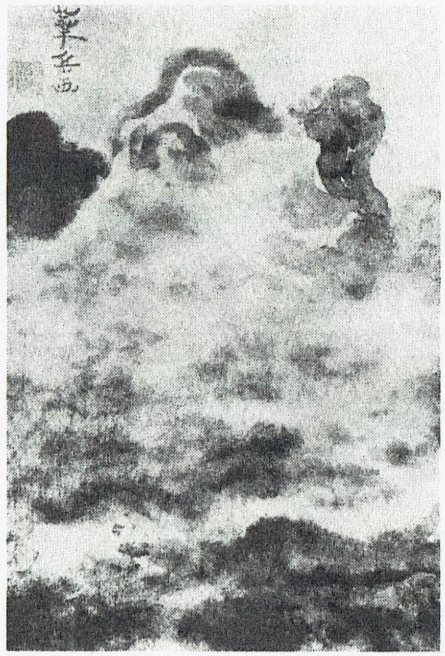
# 雨趣十選 ⑨

画家　奥田　元宋

作家の生前と没後ほど、その寛闊を考えさせられるものはない。肉体は消滅しても作品だけは本の人の別の物体として残り、それは未来永劫（ごう）に生きるのである。その人間の随伴物は、死という瞬間からそこを離れて作品独自の正味で動き、そして歩みを始めるのである。そして生前以上に力を加えてその真価を発揮するものと、またその逆のものとがあるが、これはいかんともしがたい。



村上華岳　山雨空濛（雨中行人図）

村上華岳の近来の声価などは、まことにその前書の好例であろう。今春東京国立近代美術館で大規模な回顧展が開かれ、またときわ礼讃の声が高くなった。これは華岳の珍しい雨の絵の一点である。その構成は一種中国古画を思わせる趣があるが、画面をおおう朦霧（えんむ）の表現は無類である。中央の高い峰を囲繞（いじょう）する山霧は靄靄（あいたい）として、いつまでも晴れようとしない。山道を一人の行人が傘をきて、またとぼとぼ歩む。その姿態が全体の雰囲気の中に見事な調和をかもし出すのである。

副題にもあるこの点景人物が極小に扱われて逆に、全体の画面をスケールの大きなものにしている。華岳の作家としての陰翳（いんえい）と、心にしみる思索の深さが脈々と伝わって来る絵である。（昭和十三年、紙本墨画三五・〇×三三・〇㌢）

# 文化往来

## 邦楽の近代化

邦楽というと、すぐ「伝統」「古風」といったことばが想起されてしまう。しかし、邦楽も古い形のままだけにとどめず、新しい時代の音楽として開花させる試みは、明治以来、さまざまな形で繰り返され、邦楽器による新作品も数多く生み出された。そうした邦楽の軌跡をたどる「現代日本音楽の展開」が六月二十八日、東京・国立劇場で開かれる。

国立劇場が昨年から年一回の企画として始めたもので、第一回は器楽部門を特集、富城資雄などの作品を演奏。第二回のことしは大正から現代の声楽作品四曲をとりあげる。まず「瀧陽江（じんようこう）」。白楽天の「琵琶行」が素材になっており、岡鬼太郎の詞に、四世杵屋佐吉が大正十年に作曲した。伴奏は各種の三味線、箏、二絃琴、笛、胡弓などからなり、これら「邦楽オーケストラ」をバックに歌うスケールの大きい作品だ。四世佐吉は、宮城道雄とともに、邦楽界に新しい作曲法をもたらしたことで知られる。

戦後では、昭和三十八年に菅野浩和が作曲した「安達が原の鬼女」。これは「邦楽器によるモノ・オペラ」と副題がついている通り、メゾ・ソプラノの独唱に尺八など四つの邦楽伴奏が加わるという、和洋合体の形式。「邦楽四人の会」の委嘱作品でもあり、初演以来、高い評価を受けている。ほかに、室生犀星の詩に田抄太郎が作曲した「檜の木」、中田博之作曲、竹内道敬作詞「王昭君」。さらに国立劇場がこの演奏会のために三善晃に委嘱した器楽曲「風紋」を初演する。

邦楽器を活用した現代音楽演奏会は、近年盛んにはなってきたが、これだけの規模のものはめったにない。戦前、戦後の流れが理解できる機会でもあるだけに、今後も一層充実したシリーズにしてほしいところだ。海外でも注目されだして出番も増えている時代だし、邦楽のこれから考えると上でも、こうした演奏会は貴重といえよう。

# 「ありがとう」17年800回

◇「屋根の上のヴァイオリン弾き」観客の声援が支え◇

森繁　久弥

※　※　※

**本場の演出家呼び練習**

六月十四日。ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」が公演八百回を迎えた。初演以来十七年間、主役のテビエを務めているのは本場ブロードウェーでも例のないことらしい。

といって自慢する気は毛頭ない。長くやってさえいれば偉いわけでなし。それに屋根の上……」にとって、八百回は単なる通過駅の一つに過ぎないのだから。

それにしても、こんなに長くテビエをやろうとは、初演時にだれが想像しただろう。

昭和四十二年、ミュージカルが全くなかったわけではないが、今のように猫も杓子（しゃくし）もミュージカルをさせてやり、見る、という状況からは程遠い、いわばミュージカルの創世期であった。

私にしたって、秦豊吉一座などでやっていたものをミュージカルといえばいえたが、翻訳もの、それもブロードウェーでヒット中の本格的なミュージカルは初めての出演、そして主演であった。

まずは勉強せい、とて、ブロードウェーに〝本物〟を見にやらされたが、何とス時差ボケがひどく、一日目、二日目は劇場で居眠りをする始末。三日目になって初めてメモをとる余裕が生まれた。

こんなにうまくはできわい、というのが正直な感想だった。楽屋に通され、その時のテビエ役ハッシェルベルナルディに、「これがセカンド・テビエ、この人がサード・テビエ」と、代役、そのまた代役を紹介されたのには驚いた。

日本の初演を前にして、ブロードウェーからサミー・ベイスなる人物が演出、振付指導にやって来た。オリジナルの演出者で振付家ジェローム・ロビンスの意を我々に伝えようと、この〝ミュージカル素人集団〟に、実に多くのことを要求してくる。

さんざん歌を練習し、踊りをけいこしたその後で、「ノー・シング、ノー・ダンス」という。歌うな、踊るな、と言われたって、それじゃあ、今までやってきたのは何なのだ。キョトンとしている我々に、「イヤ、歌手が歌ったり、踊り手が踊ったりするんじゃない。村人が歌うんだ。まずは村人になってくれ」。

そこで二人ひとりが個性ある村人になるために、ひとり残らず履歴書を書かせられた。「私はロシアのアナテフカ村に生まれ……だれれに恋をしたけれどかなえられなかった……」なんエ、それぞれが想像を豊かにして、台本にはない履歴を作った。

※　※　※

**初日は五分の一外国人**

初日は九月十日だった。菊田先生のアイデアで、都内のホテルにポスターをはったためか、我が「屋根の上のヴァイオリン弾き」はまず外国人の間で話題になっていた。「ニューヨークで見てとても良かったが、あれと同じものを日本人が帝劇でやるらしい」と。

そんなわけで、観客の約五分の一は外国人。彼らはそれぞれに見巧者そろいだった。個々が芝居の世界にのめり込んで、手をたたきたいところでたたき、笑いたい時に笑う。芝居は観客が作るということばのごとく、担手が来ると乗ってしまう。役者とは単純なものだ。

初演の新聞評は必ずしもよくなかった。新聞記者もミュージカルなど見たことない人間が多く、「何だか森繁が屋根の上でバイオリンを弾いている」なんていう調子で書かれたこともあった。バイオリンを弾いているのは別人だ。

しかし一般の受けはよかった。この作品はロシアにおけるユダヤ人たちの悲哀を描いたものだが、私たちはこれを日本の物語として受け止めた。日本の話によく似ているじゃないか。日本の習慣と同じだねえ、と。

日本語としては衛の浮くようなセリフがたくさんあったが、それらを極力排除し、日本の風土になじむようにもした。大森の料理屋のおカミさんが、芸者たちを連れて見に来てくれた時、「わからなかったんじゃないか」と心配したが、「何言ってるのよ、わかったわよ」と喝され安心した。そんなこんなで後半、我々ものびのびとなったし、お客の入りもよくなった。

※　※　※

**健康に注意、酒を断つ**

その後八年のブランクの後、「屋根の上……」を再演、断続的に上演してきょうまで来たわけである。

私のほか、司祭の益田喜頓さん、その息子役の三王直也さん、仲人婆さん役の西原夏子さん、初演の長女役の長谷川初子さんが、初演の長女役の賀原夏子さん、巡査部長の須賀不二男さん、仲人婆さん役の西原夏子さん、初演の長女役の長谷川初子さんが、初演以来のメンバーである。

長く続いても自慢にはならない、と初めに言いたが、それでも健康には少しばかり注意した。何しろ私にはサンド・テビエもサード・テビエもいない。

まず酒をやめた。生来付き合いがいいものだから、飲み会というと、飲みたくもないのに出て行く。もう一杯、もう一杯、と眠いのをガマンして付き合う。チョロチョロとなさけない音をたてて出る我が小便を見ながら、ああ、こんなバカらしいことはやめようと心に決めた。十年前のことである。

初めは困った。四十年間、毎日ボトル一本空けていた男が、うちに真っすぐ帰って来る。やることがない。メシだって三十分あれば終わってしまう。あっちでウロウロ、こっちでウロウロ。そう言えば長いこと本を読んでないことに気がついた。本を読む時間もでき、文章もちょっと書けるようになった。女房など私が目の前をウロチョロするのが目ざわりなのか、「少しどこかで飲んだらどう」などと不屈きなことを言ったが、我ながら意外と意志強固だった。酒を断ったら、もう一つ断つものがある。女性である。週刊誌のエジキになるようなことはすまいと、こういでに決心した。つまり、さらば享楽よ、である。

それでも夜、ギックリ腰になった夢を見てうなされたり、旅公演のホテルで真夜中、声が出ない夢に飛び起きて、便所でアーアー大声を出し、隣の部屋から苦情が来たこともあった。

うちを出る時に、きょうは休みたいな、と思ったことも、二、三度あったが、くじけてそうになる心を励ましてくれたのは、前の向こうから聞こえる満員の客席のどよめきだった。

※　※　※

**忘れられぬ沖縄公演**

松山公演の時、公演が終わり、劇場周辺はもう真っ暗。メーキャップを落とし楽屋口から出ていくと、暗い中にすらっと芸者さんたちが並んでいる。みんながみな、胸元で手をふわせ、「ありがとうございました」。こんなことを言われる芸者だとは思ってもみなかった。

沖縄での公演も忘れられない。ユダヤ人村のアナテフカの連中に退去命令が出る場面で、客席のあちらこちらから嗚咽（おえつ）が聞こえてきた。たまらなかった。あくる日、沖縄のみなさんと話す機会があった。「この芝居は私たちに勇気を与えてくれた」という。「離れ民族である私たちは元来、陽気なのだけれど、それが歴史と我々の責任で陽気でなくなってしまった」というのである。アナテフカの人たちは、悲しみ過ぎる運命の中で明るく暮らしていたのだ。

この十七年間、多くの人から手紙をいただいた。離婚を決意したが、帝劇のそばの帝国ホテルに泊まっていて、何気なくこの芝居を見た女性から。「もういっぺん、主人の元でやり直してみます」とあった。

なぐさんの人が、どうやってこの芝居を受け取ってくれる。きょうもやりたい、という気持ちは、この人たちに支えられている。

（もりしげ・ひさや＝俳優）

## 交遊抄

九州大学工学部応用化学科の昭和二十二年卒業の同窓生で「そうじろう会」をつくり、毎年旧交をあたためている。

わたし自身は長崎で原子爆弾の学校は同市の南山常高等小学校だが、六年生の時担任、永山信先生が強く印象に残っている。

先生は京大出で哲学を専攻されたのであるが、個人的にもかわいがってもらい、幼い思考なりに、西田幾多郎、カント、ヘーゲル、